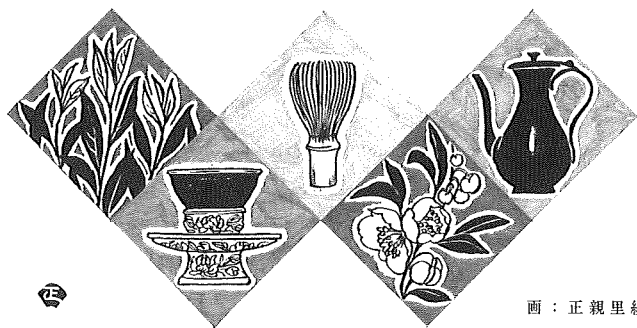


禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

第8回 道元禅師とお茶の話（下）

館 隆志

道元禅師は、入宋後、さまざまな修行道場を訪れ、さまざまな禅僧を訪ね歩きますが、満足する師に会うことができずに、「日本・大唐の両国、吾の如き善知識無し」と「大橋慢」の心を起こしたといえます（『三大尊行状記』道元禅師章）。しかし、機縁かなって天童山の如浄禅師に参じ、その下で親しく参学して、遂に曹洞宗の法を嗣ぎました。そして、帰国した後は、禅を広く人々に説き示したのです。

道元禅師の修行した南宋禅林では、日々の修行生活の中で茶を飲むことが清規（禅寺の修行生活の規則）に定められています。道元禅師が日本で建立した寺院は、南宋禅林にならって清規に則った修行生活を実践しました。日本において最初に清規を導入した僧侶は栄西禅師ですが、あくまで宋朝式の修行生活である清規を一部用いていたと考えられるだけであり、南宋禅林の完全な再現とはいえないものでした。

しかし、道元禅師は本格的に清規に則った

修行生活をし、さらにそのことを自身の撰述した清規にも記しました。そのため、道元禅師の清規や、それに関連する史料には茶に関する記述が多くあり、それらの史料から、当時のような時にお茶を飲んでいたかがわかるのです。

道元禅師の清規には、特別な日に飲む特為茶という儀礼とともに、修行生活で毎日茶を飲むことが記されています。

たとえば、『知事清規』には「新到の茶湯は、特為にして礼を闕くを得ざれ（新到に対する茶湯は、特別に設ける茶礼であり、礼節を欠いてはならない）」とあります。新しく寺に到着した雲衲（修行僧）に対して、特別に設ける茶湯を行う場合は、礼節を欠いてはならないことが記されています。雲水として行脚し、新たに寺院に到着した修行僧を、客人としてもてなしていたものと考えられます。

禅寺の入門という時、現在の我々は曹洞宗のように山門前で何時間も雪の中を立たされていたり、臨済宗の庭詰のように二日間も頭

を下げた状態で入り口でひたすら座り込むといった、とてもひどい……とても厳しいものをお願い浮かべます。お茶や香湯の接待は、ちよつと意外な感じがします。また、夏安居の修行期間が終了する七月十五日に合わせて、やはり茶を皆で飲んでいたようです。このような、特別の茶礼は、多く清規に則って行われていたと考えられます。

一方、特別なお茶の日とは別に、毎日飲むお茶というものがありました。道元禅師の清規からは、朝のお粥と、お昼のご飯が終わってから、お茶を皆で飲むことが記されています。そして、道元禅師の著述には、お茶に関する公案（禅の課題）や、お茶にまつわる話が数多く収録されています。道元禅師にとつて、お茶はとても身近なものであったことがわかるのです。

中国の禅寺では、茶は特別な時に飲むというだけではなく、そもそも毎日飲むことが、清規に記されていますが、道元禅師も同じように毎日お茶を飲んでいたことが著述から確

認できません。しかし、規則に記されているからといって、当時の日本とすれば珍しかった茶を本当に毎日飲んでいたの？という疑問をお持ちになる方もいることでしょう。

道元禪師が説法でたびたび用いる言葉に、「家常茶飯」「尋常茶飯」という言葉があります。これらの言葉は、もちろん中国禪僧たちが古くから用いていた言葉です。「家常」「尋常」とは、言い換えれば「日常」ということであり、このような言葉が説法で使われることは、中国の禪寺でいかに古くから茶が飲まれていたのかを物語っています。

中国であれば、禪寺以外でも茶が普通に飲まれていました。しかし、日本ではまだまったのでしょうか。もちろん、日本ではまだまだ一般的にお茶が飲まれていると言うにはほど遠い状況だったでしょう。

しかし、道元禪師の説法は禪寺で修行僧に行ったものですから、禪寺での実態を考える必要があります。もし、当時の日本の禪寺で日常的に茶を飲まないならば、修行僧に「家常

茶飯」「尋常茶飯」の言葉を用いて説法するのでしょうか？つまり、道元禪師のお寺では茶が日常的に飲まれていたからこそ、「家常茶飯」「尋常茶飯」という言葉を用いたのではないのでしょうか。現代の「日常茶飯事」を意味する言葉を用いて、道元禪師は修行僧に説き示していたと考えることができるのです。

現在の我々は、「日常茶飯事」を毎日のありふれた事柄を示す言葉として使っています。鎌倉時代中期には、「茶飯」という言葉が禪寺の中で、日常を示す言葉として用いられるほど、茶が禪寺で普及していたことが、道元禪師の残した著述からうかがえるのです。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師・花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『圓城寺公胤の研究』（春秋社）、『關深道隆禪師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。